ウィトゲンシュタインの
テクストを手元に引き寄せる③

2023年3月15日 @東北大学自主勉強会, via Zoom

槇野沙央理（morerain19@gmail.com）

【再掲】自己紹介

- 槇野 沙央理（まきの さおり）
- 所属：大正大学等非常勤講師
- 専門：ウィトゲンシュタイン
- 博論タイトル：「自己明晰化としてのウィトゲンシュタイン哲学 : 治療的解釈を超えて」
- 最近思うこと：テクスト解釈の範囲ではやりたいことができない気がしています

【再掲】配布資料と文献表の案内

- 資料は、槇野のウェブサイトにて配布しています。
- 「2023年 東北大学自主勉強会 特設ページ」
- https://saorimakino.weebly.com/2648121271228232339833258200272119324375202 50.html

【再掲】場の安全性について

- ミスジェンダリングを避けるため、敬称は基本的に「さん」ないし「先生」を使います。
- ウィトゲンシュタインはひどいミソジニストでした。そうした彼の発言を面白おかしく取り上げることに反対します。

今日のテーマ

- ウィトゲンシュタインの「概念形成」について
  - 前回：中期ウィトゲンシュタインを中心にお話しした
  - 今回：中期-晩期の関係を考察

目次

1. 前回のおさらい（と補足）
2. 移行の「あり方」から「仕方」へ
3. 概念形成と概念改造
4. 中期から後期・晩期へ
5. 課題

1, 前回のおさらい（と補足）

概念形成とは

- ある数から次の数、式の左から右、推論の上から下といった「移行」のありように、私たちが抱いている確信がどのようなものであるかを、自己明晰化していく方法
- 比喩的に言うならば、私たちが絶対だと思うことに切り込んでいく考え方

引用箇所を読むヒント

- 「数を数える」「計算する」「証明する」「推論する」といった数学の基礎的な営みは、同じことを繰り返していると言われるのか、それとも、その都度ごと異なることをしていると言われるのか
- 前者：かくあらねばならぬという規則に従っている（強い同一性）
  - 「+1をせよ」という命令でできることは一つに決まっているはずだ
- 後者：記号レベルでは同じと言えそうなものを取り扱っていても、実はその取り扱い方が変わっている（弱い同一性）
  - 「+1をせよ」という命令でできることは特定の基準の採用によって一つのことに決まる

何を考え

視野を固定し、その中に生起することのみに注意を向けている

- 「数を数える」といった数学の基礎的な営みは、同じことを繰り返し も、その都度ごと
  言われるのか

手元（視野の結び方）を意識しながら、視野の中に注意を向けている

- 前者：かくあらねばならぬという規則に従っている（強い同
  - 「+1をせよ」という命令でできることは一つに決まっているは
- 後者：記号レベルでは同じと言えそうなものを取り扱っていても、実はその取り扱い方が変わっている（弱い同一性）
  - 「+1をせよ」という命令でできることは特定の基準の採用によって一つのことに決まる

『数学の基礎』第二版3-29/第三版4-29

経験の限界––それは概念形成[Begriffsbildung]である。

「かくあるであろう」から「かくあらねばならぬ」へと、私はいかなる移り行きを行うのか。私は別の概念を形成するのだ。以前には存在しなかったものがその中に含まれている概念を。「これらの導出が同じならば、……でなければならない」と私が言うなら、そのときは何かを同一性の規準にとっているのだ。したがって同一性の概念を改造しているのだ[um|bilden]。

『数学の基礎』第二版3-29/第三版4-29

　しかしそこである人が次のように言うとしたらどうか。「私にはその二つの過程は自覚されない。私は経験だけを自覚しているので、経験から独立した概念形成や概念改造を自覚してはいない。私には、すべてのものが経験に奉仕しているように思われる。」

　換言すれば、われわれは、あるときにはより理性的になり、あるときにはより理性的でなくなるとか、あるいは、われわれの思考形式を変え、それによってわれわれが「思考」と呼ぶものが変わるとかいうふうには思えない。われわれはいつもわれわれの思考を経験に適合させているだけのように思われる。

『数学の基礎』第二版3-29/第三版4-29

　ある人が、「君がその規則を守るのなら、かくあらねばならない」というときは、その反対物に対応している経験の明確な概念を持っていないことは明らかである。

　あるいはまた、違った事態であるとすればどうみえるであろうか、ということについて、彼が明確な概念をもっていないことは明らかである。そしてこれはたいへん重要なことである。

着眼点

- 「概念形成Begriffsbildung」と「概念改造Begriffsumbildung」とを以下のように考える
  - 概念形成：ある移行を特定の仕方で得ること
  - 概念改造：ある移行を唯一のあり方として得ること

『数学の基礎』第二版3-30/第三版4-30

　例えば「君が本当に同じことを二回行うなら、結果も同じでなければならない」とわれわれが語るような仕方で、同一性の概念を形成するようにわれわれを強制するのは何なのか。——何がわれわれを、規則に従って進むように、あるものを規則とみなすように、強制するのか。何がわれわれを、すでに学んだ言語の形式において語り合うよう強制するのか。

『数学の基礎』第二版3-30/第三版4-30

　というのも、語「ねばならぬmuß」は、われわれがこの概念から離れられない、（それとも「欲しない」というべきか）ということを確かに表現しているからである。

　実際、私がある概念形成から他のそれに移行しても、旧概念は依然として背景にそのままあるのである。

『数学の基礎』第二版3-30/第三版4-30

　私は、「証明は、われわれを一定の決意へ、しかも一定の概念形成を受け入れる決意へと連れて行く」と言えるだろうか？？

　証明は、君を強制する手続きとみなさないで、君を導く手続きとみなせ。––しかもそれは、ある（一定の）事態に対する君のとらえ方を導くのである。

『数学の基礎』第二版3-30/第三版4-30

しかし証明は、われわれが一致してその影響を受けるように、それぞれを導くのは、どのようにしてか。では、われわれが数を数えるとき一致するのは、どのようにしてか。人はいうかもしれない。「われわれはまさにそのように訓練されているのだ。またそのようにして作り出された一致は、証明によって継続せしめられるのだ。」

『数学の基礎』第二版3-30/第三版4-30

　この証明の過程で、われわれは定規とコンパスによる作図を排除する、角の三等分に対する見方をつくった。

　ある命題を自明として承認することによって、われわれはまた、その命題から経験に対する一切の責任を免除する。

　証明の過程で、われわれの見方が変えられる––また、それが経験と関連するということは、そのことを妨げるものではない。

　われわれの見方が改造されるのだ。

読解ポイント

- ウィトゲンシュタインは、概念改造（移行の得方は唯一であるという考え）を私たちの見方の変化として、捉えようとする
- 「かくあらねばならぬという規則に従っている」という強制的な描像を被るように思われるときにも、「自分が一定の予想図に従って導かれている」という描像を採用しているのだと考えようとしている
  - 「証明は、君を強制する手続きとみなさないで、君を導く手続きとみなせ。——しかもそれは、ある（一定の）事態に対する君のとらえ方を導くのである。」（RFM 3-30/4-30）

なぜそんなことをするのか？

- 「概念形成」において「概念改造」の捉え直しができるようになるため
  - 「+1」でできることは今唯一に思えても実は別様にも考えうる。
  - 注意：「+1」で得られる「結果」は一つのことには決まらない、という懐疑的主張ではない。

概念形成のポイントは何か

- ある移行には唯一のあり方しかないとみなす「概念改造」も、一旦は受け入れられる。（ここで懐疑論者と道が分かれる。）
- その上で、その移行の「あり方」は、実は、「結果」と、その結果を得る「プロセス」とに分節化可能であると考える。
- 結果を得る「プロセス」の中で、移行に唯一のあり方しかないと思わせる何らかのしかけ（同一性の基準の採用）が見つかる。
- 唯一のあり方しかないと思われた移行は、特定の基準の採用によって得られることとして捉え直される。

2, 移行の「あり方」から「仕方」へ

いかに移行を問題とするか

- 移行A「1、2」移行B「2、3」移行C「3、4」があるとする
- 移行Aでやったこと、移行Bでやったこと、移行Cでやったこと、これら三つのことに同一性があるという「みなし」はいかになされるかを、自己明晰化していく

移行の自己明晰化のコツ

- 『論考』で言うところの「論理定項」が行っていることを、専門的な記号（→、∧、∨、¬）を用いずに、示す
- 一人称の視点でやっていること（手元）を意識する
  - 左側の残像を保ったまま、右側を見る

移行AからCを段階にする

- 移行A「1、2」を与える
- 移行A「1、2」と移行B「2、3」を与える
- 移行A「1、2」と移行B「2、3」と移行C「3、4」を与える

*移行結果の「A」「B」「C」から、移行プロセスの「A」「A、B」「A、B、C」を得た。

移行プロセスの展開

操作	やったこと
「1」を与える 移行x(1→ϕ)/ x'(ϕ→1)	移行（ペアリング）の部分を与える
移行A「1→2」を与える	「1」を与えたときにやったことを持ち越し、 移行Aを終える
移行A「1→2」と移行B「2→3」を与える	移行Aでやったことを持ち越し、移行Bを終える
移行A「1→2」と移行B「2→3」と 移行C「3→4」を与える	移行AとBでやったことを持ち越し、 移行Cを終える

移行プロセスの展開（続き）

操作	やったこと
「1」を与える 移行x(1→ϕ)/ x'(ϕ→1)	移行（ペアリング）の部分を与える
移行A「1、1→2」を与える	「1」を与えたときにやったことを持ち越し、 移行Aを終える
移行A「1、1→2」と 移行B「1、1→2、(1、1→2)→3」を与える	移行Aでやったことを持ち越し、移行Bを終える
移行A「1、1→2」と移行B「1、1→2、(1、1→2)→3」と移行C「1、1→2、(1、1→2)→3、((1、1→2)→3)→4」を与える	移行AとBでやったことを持ち越し、 移行Cを終える

移行プロセスの展開（続き）横書きver.

- 移行（ペアリング）の部分を与える
  - 「1」を与える
- 「1」を与えたときにやったことを持ち越す
  - 移行A「1、1→2」を与える
- 移行Aでやったことを持ち越す
  - 移行A「1、1→2」と移行B「1、1→2、(1、1→2)→3」を与える
- 移行AとBでやったことを持ち越す
  - 移行A「1、1→2」と移行B「1、1→2、(1、1→2)→3」と移行C「1、1→2、(1、1→2)→3、((1、1→2)→3)→4」を与える

移行プロセスの展開（続き）横書きver.

- 移行（ペアリング）の部分を与える
  - 「1」を与える
- 「1」を与えたときにやったことを持ち越す
  - 移行A「1、1→2」を与える
- 移行Aでやったことを持ち越す
  - 移行A「1、1→2」と移行B「1、1→2、(1、1→2)→3」を与える
- 移行AとBでやったことを持ち越す
  - 移行A「1、1→2」と移行B「1、1→2、(1、1→2)→3」と移行C「1、1→2、(1、1→2)→3、((1、1→2)→3)→4」を与える

全ての段階で
異なることをやっている

プロセスの展開からわかること

新しい移行は、古い移行から持ち越されたものを上書き（一番右の矢印）している

- 移行A「1、1→2」
- 移行B「1、1→2、(1、1→2)→3」
- 移行C「1、1→2、(1、1→2)→3、((1、1→2)→3)→4」

プロセスの展開からわかること

新しい移行は　　持ち越されたものを上書き（一番右の矢印）し

移行のもと

- 移行A「1、1→2」

移行A

- 移行B「1、1→2、(1、1→2)→3」

移行B

- 移行C「1、1→2、(1、1→2)→3、((1、1→2)→3)→4」

プロセスを無視するとどうなるか

- ただ単に「1、2、3、4、［...］」と書くことは、これまでの移行でなされた上書き操作を無視し、一番右側の移行の「結果」のみを採用することにあたる
- すると、移行が進むごとに生じる、「持ち越し」分を削除・無視することになる
- これが、移行には唯一のあり方しかないと思わせるしかけ（＝複数の異なる移行の間に、同一性を担保する「+1」をあらかじめ措定すること）

「あり方」から「仕方」へ

- 「持ち越し」分の削除を、見えないところで行なってしまうのでなく、公然と行う
- そうすれば、同一性の基準を秘密裡に持ち込むのではなく、自分たちで積極的に（能動的に）採用したことになる
  - 「自覚的」という言い方のほうがいいかもしれない

持ち越し分の任意の削除

帰結のみわかる

- 移行A「~~1、1→~~2」
- 移行B「~~1、1→2、(1、1→2)→~~3」
- 移行C「~~1、1→2、(1、1→2)→3、((1、1→2)→3)→~~4」

持ち越し分の任意の削除

上書き操作がわかる

- 移行A「~~1、1→~~2」
- 移行B「~~1、1→2、(1、1→2)~~→3」
- 移行C「~~1、1→2、(1、1→2)→3、((1、1→2)→3)~~→4」

持ち越し分の任意の削除

繰り越し操作を被る基底（古い結果）がわかる

- 移行A「~~1、~~ 1→2」
- 移行B「~~1、1→2、(1、1→~~2)→3」
- 移行C「~~1、1→2、(1、1→2)→3、((1、1→2)→~~3)→4」

3, 概念形成と概念改造

「概念形成」と「概念改造」

- 移行同士の同一性を明示化していく「概念形成」と移行同士の同一性を前提する「概念改造」、どちらがプリミティブでどちらが作為的か？

  - どちらをプリミティブと取ることも、作為的と取ることも可能

「概念形成」の方が作為

- 「概念形成」の方が作為的である、という立場
  - 理由：省略されているプロセスを（わざわざ）復元する必要があるから
- 小学校では、「1、2、3、4、5［...］」と習う
- 省略した書き方がデフォルトだとすれば、復元は作為である

前者の問題点

- 「概念形成」の方が作為的であるという立場の問題点
- 省略した書き方がデフォルトだとすれば復元は作為であると言うが、そもそもなぜ省略が可能であるのかについて、明示していない
- 持ち越しの省略を可能にするために、実は秘密裡に、省略の基準が持ち込まれているのではないか？

「概念改造」の方が作為

- 「概念改造」の方が作為的である、という立場
  - 理由：実行されたプロセスを（わざわざ）削除することでなされているから
- 実は移行がなされるその都度ごと「持ち越し」があるなら、それを削除することが作為

後者の問題点

- 「概念改造」の方が作為的であるという立場の問題点
- 「持ち越し」を削除することが作為なら、「1、2、3、4、［...］」と、「1、1→2、(1、1→2)→3、((1、1→2)→3)→4」とは本来別物ということになる
  - 二つの列の間に置き換えの規則（i.e. 結果のみを見る）を設けることで持ち越し削除を認める
- 上の二つの列が別物ということは私たちの直感に反する？

どちらの立場を取るべきか

- ウィトゲンシュタイン的な考え方をするなら…
  - 「仮に誰かが哲学において様々なテーゼを打ち立てようとしても、それについて議論になることは決してありえないだろう。全員がそれに同意するだろうから。」（PU 128）

どちらの立場を取るべきか

- 『探究』128節をどう解するか
  - そもそも何らかのテーゼの成立を認めない
  - 何らかのテーゼが立つように見えても、実はそのテーゼと相反するテーゼとは争うのでなく補完し合っており、異なる「見方」同士が、互いの立場を照らし出しているだけ
  - 何らかのテーゼが立つように見えるとき、そこで補われるべき対照的な見方を探し、調和をもたらすのが哲学の仕事

どちらの立場を取るべきか

- 「概念形成の方が作為である」と「概念改造の方が作為である」
- 両者の強みと弱みとを記述することで、補完的な視点として取り扱う

槇野の考え方

- ウィトゲンシュタインに反するかもしれないが、後者の立場をとる
  - 概念形成：プリミティブ
  - 概念改造：作為

槇野の考え方

- ただし、以下を認める
- 概念形成をプリミティブと見ることに弱点がある
  - プロセス重視であるので、結果を得るのに時間がかかる（結果の違いを知りたいときに不便）
- 概念改造にも利点がある

4, 中期から後期・晩期へ

「中期から後期・晩期へ」という問題

- 問い1：数学の基礎をめぐる考察（計算する、推論する、証明するetc.）において登場してきた「概念形成」が、より広く、日常言語一般においても問題matterとなるか

- 問い2：数学の基礎をめぐる考察から、「心理学の哲学」と呼ばれる考察へのテーマの変化を概念形成は説明するか

晩期ウィトゲンシュタイン

『探究』第二部365節

概念形成が自然に関する事実によって説明できる場合、我々は文法に代えて、自然において文法の基礎となっているものに興味を持つべきではないのだろうか？––たしかに、我々の概念と自然に関する一般的な事実（一般的であるため、たいてい我々の目に止まらないような事実）の対応関係は、我々にとって興味深いものだ。だからといって、我々の興味がここで、概念形成のそうした可能な原因へと後戻りするわけではない。我々は、自然科学を行なっているわけではない。自然誌的研究を行っているわけでもない、–というのも、我々の目的のために、自然誌上の架空の出来事を案出することもあるのだから。

『探究』第二部366節

私は、仮に自然に関するしかじかの事実が別様であったなら、人間は別の概念を持つだろうと（仮説の意味で）言っているのではない。そうではなくて、ある種の概念が絶対に正しく、それと違った概念を持つ人は、我々が理解しているあることを理解していないのだ、と信じる人–そうした人に、極めて一般的な事実が、我々の慣れ親しんでいるものと違っているところを想像してほしいのだ。そうすれば、普通のものとは違う概念の形成が理解できるようになるだろう。

【再掲】概念形成のポイントは何か

- ある移行には唯一のあり方しかないとみなす「概念改造」も、一旦は受け入れられる。（ここで懐疑論者と道が分かれる。）
- その上で、その移行の「あり方」は、実は、「結果」と、その結果を得る「プロセス」とに分節化可能であると考える。
- 結果を得る「プロセス」の中で、移行に唯一のあり方しかないと思わせる何らかのしかけ（同一性の基準の採用）が見つかる。
- 唯一のあり方しかないと思われた移行は、特定の基準の採用によって得られることとして捉え直される。

概念形成をどう使うか

- 概念形成で得られたプリミティブな民族との距離をどう捉えるか
  - 遠い：「われわれ」の範囲を極度に狭くする
  - 近い：「われわれ」の範囲の拡大

概念形成をどう使うか

- 概念形成で得られたプリミティブな民族との距離をどう捉えるか
- 遠い：「われわれ」の範囲を極度に狭くする
  - 自己明晰化をブロック（契機の封じ込め）
- 近い：「われわれ」の範囲の拡大
  - 他者の到来を通じて自己明晰化を行う

5, 課題

原・移行について

- 移行Aのもとである「1」をどうやって得ることができるか
  - 結局これがわからないと、移行「→」もできないのではないか
- 古いこと（「1」）から出てくるにも関わらず、同時に古いことにはとどまらない、そのような移行（「1、2」）が可能であるのは、そもそも、もとの「1」の与え方が重要ではないか

原・移行について

- 移行Aのもとである「1」をどうやって得ることができるか
  - 見通し：移行の元である「1」が得られれば、移行A「1、2」も得られる。これを、最小単位が得られれば、複数のことが得られる、とみなす。（『論考』における「名」の得方として問題をセッティングできる。）

ご清聴ありがとうございました

「1」を与える

- 移行x(1→φ)
- 移行x′(φ→1)

移行x(1→φ)

- 「シューベルト！」から得られる全体はどんなことか、「シューベルト！」はいかなる「像Bild」か、どんな「内的関係」を有するか
- x(シューベルト！→φ)
- 未規定？
- シューベルト！→作曲家
- シューベルト！→（具体的な曲名）

移行x′(φ→1)

- x′(φ→シューベルト！)
- 「シューベルト！」を与えることで捨象される繰り越しの可能性は何か
- バッハ、ワーグナー、［...］、シューベルト！
- 確定を与える、列に終わりを与える